

令和三年二月十日

佐藤一斎

(1772~1859)

# 『言志四録』を読む

佐藤一斎は徳川幕府の大学である昌平坂学問所の儒官であった。いまで言えば、大学総長というところである。

当時、各藩には藩校があり、その数は全国で二百三十を超えていた。各藩ではこそつて藩校の成績優秀者を昌平坂学問所に送り、一斎の薫陶を仰いだ。その門に学んだ者三千人を超すという。佐久間象山、山田方谷、安積良斎、横井小楠など、幕末から明治にかけての日本を動かした逸材を数多く輩出している。

西郷隆盛もまた「言志四録」を愛読した。その中から特に心に響いた百一条を抜き出し「手抄言志四録」を編纂、自らの指針としたのみならず、彼の私学校の青年たちこれに講説したという。

西郷ばかりではない。幕末から今日まで、この書にいかにも多くの人が傾倒し、また多くの示唆を受けたかは、計り知れないものがある。

「言志四録」は幕末の儒者佐藤一斎の四十二歳から八十二歳にかけての語録である。四篇から成る。従って「四録」である。

その成立を順に追うと、次の通りである。

言志録——四十二歳〜五十三歳（二百四十六条）

言志後録——五十七歳〜六十六歳（二百五十五条）

言志晩録——六十七歳〜七十八歳（二百九十二条）

言志叢録——八十歳〜八十二歳（三百四十条）

総数千百三十三条の名語録である。

釋註

一斎書

忍字 佐藤一斎筆 東京国立博物館蔵

1日 天を師とする

【訳】 最上の人物は天（宇宙の真理）を師とし、第二級の人物は聖人や賢人を師とし、第三級の人物は聖賢の書を師として学ぶ。

○西郷南洲も「天」という言葉をよく使った。内村鑑三は『代表的日本人』の中で、西郷は天と対話していたのではないかと記している。人は天を師として、初めて生かされている身のありがたさを知るものである。

2日 事業の心得

【訳】 すべて事業を行うには、必ず天の意志に従う心を持つべきである。他人に誇示する気持ちがあつてはいけない。

○天に事うるとは、天を尊敬してそれに従う。人を相手にせず、天を相手にして生きることである。

3日 憤なくして大成はなし

【訳】 憤とは発憤すること。「なにくそ」「負けてたまるか」という奮い立つ心を用う。この憤の一字が学問を進展させる機関車のようなものである。孔子の弟子の顔淵が発憤していった「(古代の聖人の)舜も、自分も、同じ人間ではないか」という言葉、これはまさに憤である。

4日 学問は立志より始まる

【訳】 学問を行うには、志を立てることより大事なものは無い。しかし、志を立てることを外から無理に強制してはいけない。ただ、その人の本心の赴くところに従うばかりである。

○立志とは生きてゆく目標を持つことである。

16日 著眼を高く持つ

【訳】 目の着け所を高い所に置くならば、道理がみえて、迷うことがない。

着眼高 則見理不歧

26日 読書の方法

【訳】 読書の法は、当に孟子の三言を師とすべし。曰く、意を以て志を逆う。曰く、尽くは書を信ぜず。曰く、人を知り世を論ずと。  
(言三三九)

【訳】 読書の方法は、次にあげる孟子の三言を手本とするべきである。第一に、自分の心をもつて作者の精神を汲み取る。第二に、書かれていることをすべて鵜呑みにしない。第三に、作者の人となりを知り、当時の世の中の状況を論じて明らかにする。  
○吉田松陰はその『講孟劄記』の中で、「聖賢に阿らぬこと。僅かでも阿るところがあれば、道明らかならず。益無くして害あり」と言っている。

30日 一燈を頼め

【訳】 一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うること勿れ。只だ一燈を頼め。(晩一三)

【訳】 手元に一つの提灯をさげて暗い夜道を行くならば、闇夜を心配することはない。ただその一つの提灯を頼りにして前進すればいいのだ。

○釈尊はその死期に際して「自ら燈明となれ、法(真理)を燈明とせよ」と阿難に教えている。

自燈明  
法燈明

10日 春風接人

【訳】 春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む。(後三三)

【訳】 春の風のような穏やかな態度で人に接し、秋の霜のような厳しい態度で自らを律していく。

○これができるように、自らを修めていくのである。

以春風接人  
以秋霜自肅

2日 学問の意義

【訳】 少年の時に学んでおけば、壮年になつて役に立ち、何かをなすことができる。壮年のときに学んでおけば、老いても気力の衰えることがない。老年になつて学んでおけば、若い者を指導することができる。死んでからもその名が朽ちることはない。

少而學 則壯而有為。  
壯而學 則老而不衰。  
老而學 則死而不朽。

8月

3日 父の道、母の道

父の道は当に厳中げんちゆうに慈じを存ぞんすべし。母の道は当に慈中じちゆうに厳げんを存ぞんすべし。(晩三二九)

【訳】 父たる者は、厳しさの中に慈愛がなくてはいけない。母たる者は、慈愛のうちに厳しさがなくてはいけない。

4日 父と子

父の道は厳げんを貴とうとぶ。但ただ幼ちゆうを育はぐつるの方は、即すなわち宜よろしく其その自然しぜんに従したがって之これを利道りどうすべし。助長じうちやうして以もつて生氣せいきを戕せまうこと勿なくんば可べなり。(晩三三〇)

【訳】 父の子に対する道は嚴格でなければいけない。ただし、幼児を育てるときには、その自然のままに従って、それとなく善い方向に導いてやるのがよい。無理やり力を加えて、子供の生き生きとした活気を損なうことがなければよいのである。

9月

22日 有字の書から無字の書へ

学まなを為なすの初はじめは、固もとより当まさに有字ゆうじの書かきを讀よむべし。学まなを為なすこと之これれ熟じゆくすれば、則すなわち宜よろしく無字むじの書かきを讀よむべし。(蓋一五)

【訳】 学問を始めるときは、もちろん文字の書かれた書を読んで学ばなくてはいけない。学問が上達してくれば、字の書かれていない書、すなわち天地自然の理を読み取るようにするべきである。

○「森羅万象これ皆師なり」の心構えが必要である。

11月

13日 逆境にあつて順を思う

逆境ぎやくけいに遭あう者は、宜よろしく順じゆんを以もつて之これを処こすべし。順境じゆんけいに居おる者は、宜よろしく逆境ぎやくけいを忘わすれざるべし。(蓋一三二)

【訳】 逆境にあつている者は、順境にいるときのような安らかな心持ちで対処していけばいい。順境にいる者は、逆境のときの緊張を忘れないようにしなければならない。